

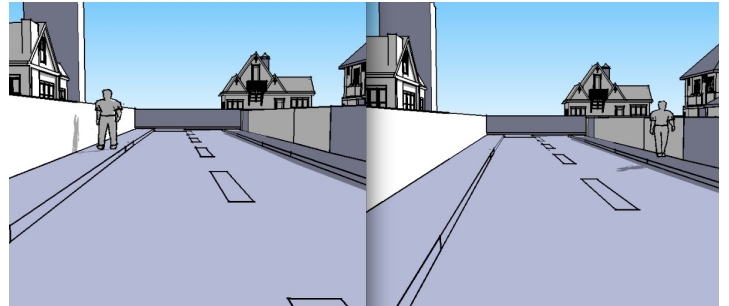
# ハザード知覚に影響を与える個々の要素の定量的検討

島崎 敢\* 中村 愛\*\* 三品 誠\*\*\* 石田敏郎\*

\*早稲田大学人間科学学術院 \*\*早稲田大学大学院人間科学研究科 \*\*\*有限会社サイビジョン

## 背景

例えば、同じ歩行者でも向きや位置、ガードレールの有無などによってドライバーにとってのハザード性が異なる。しかし、これらの要素がハザード知覚に具体的にどのぐらいの影響を与えているのかは明らかでない。



刺激の例（左：基準画像，右：基準画像から歩行者位置を右に移動させた画像）

## 目的

ハザードに関連する個々の要素が交通環境のリスク知覚にどの程度影響を明らかにする

## 手順

歩行者の状態や周辺要素を一部だけ変化した23種類の刺激画像(CG)を作成  
↓  
サーストンの一対比較法で危険度評価  
253対をランダム提示

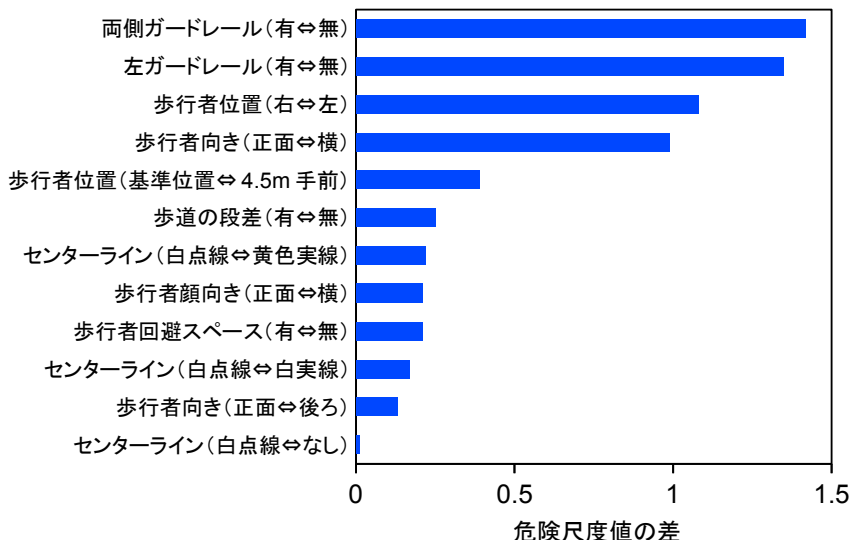
## 実験参加者

運転免許を持つドライバ34名  
平均年齢 21.5 歳, SD=5.6 歳

## 変化した条件

- 歩行者の左右位置  
右・左
  - 歩行者の前後位置  
カメラから12.9m・17.4m・21.9m
  - 歩行者の身体の向き  
手前/横断方向/奥
  - 歩行者の顔の向き  
身体に対し正面・右45°・左45°
  - ガードレール  
両側・左のみ・なし
  - 歩道の段差  
あり・なし
  - 歩行者退避スペース（壁の切れ目）  
あり・なし
  - センターライン  
白点線・白実線・黄色実線・なし
- ※下線は基準画像

## 結果



## 考察と課題

ハザードに関連する要素がリスク知覚に与える影響を定量的に明らかにできた。  
歩行者の他にも検討事項は多数あるため、様々な対象を定量化する必要がある。  
実写や動画での検討も必要である。